HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	書評 眞嶋俊造 著『正しい戦争はあるのか : 戦争倫理学入門』
Author(s)	長門, 裕介
Citation	応用倫理, 10, 30-32
Issue Date	2017-11-30
DOI	10.14943/ouyourin.10.30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/68206
Type	bulletin (article)
File Information	10_04nagato.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

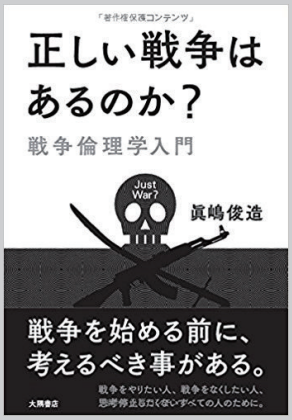
書　評

眞嶋俊造 著

『正しい戦争はあるのか ―― 戦争倫理学入門』

（大隈書店、2016 年）

長門裕介（文京学院大学）



眞嶋俊造『正しい戦争はあるのか ―― 戦争倫理学入門』（以下、本書と表記する）は、国際関係論の倫理学的考察や職業倫理を専門とする著者による極めて本格的な戦争倫理学の入門書である。眞嶋は既に『民間人保護の倫理 ―― 戦争における道徳の探究』（二〇一〇年）を上梓しており、戦争倫理学に関連する著作は二つ目ということになるが、本書は政治哲学や応用倫理に馴染みの薄い読者を念頭におきつつ「道徳判断とはなにか」「倫理学に正解は存在するのか」といった倫理の考え方からはじめて戦争倫理学の諸論点を網羅的に検討しようとすることに特色がある。

本書の構成は以下の通りである。

第一章では準備として「戦争とはなにか」「倫理とはなにか」「正義とはなにか」といった基本概念が明晰にされる。つまり、本書の基本方針としての「政治哲学または応用倫理学としての正戦論」（p.88）の構成要素である「戦争」「倫理」「正義」の定義や議論のための方法が述べられる。ここで著者がそれらの定義や原理を天下り式に与えるのではなく、まず概念分析や思考実験を用いつつ読者の直観や前提を炙り出すことによってそれを提示しようと試みていることは興味深い。本書の目的が主として特定の戦争（戦闘）の善悪を判定するというよりは、戦争について議論するための土台の構築にあるとすれば（cf.pp.293-296）、道徳判断における直観や前提の検討を迫ることから始めたのは正解だったといえるだろう。

第二章では戦争と倫理の関係をどう考えるかについて「現実主義」「平和主義」「正戦論」の三つの立場が検討される。もちろん、著者は結論として、正戦論の立場こそ戦争における道徳を論じることを可能にするもっとも標準的な思考枠組みであり、また武力行使の制限・抑制にも有効な議論を展開できるとするが、この三つの立場相互の関係はなかなか複雑である。問題になるのは、（本書の見解によれば）正戦論は現実主義や平和主義と並列する一つの立場ではなく、現実主義も平和主義も正戦論を一種の道具として利用できるという点にある。私の理解するところでは、正戦論は戦争について私たちがデフォルトで持っている立場というよりも、戦争の倫理について有意義な議論をするための万人に共通の土台（フレームワーク）を提供するものだという理論的含意があるように思われる。「戦争の正不正や善悪について、『なぜ』を、物怖じすることなく、正面から問う」（p.19）ための枠組みとして正戦論を位置づけるこの章は本書全体の要石の役割を果たしている。

第三章では、正戦論の主要な議論対象である「戦争の正義 jus ad bellum」と「戦争における正義 jus in bello」の二つについて、それぞれの枠組みを構成する諸原則が概観される。これについては前著『民間人保護の倫理』でも補論を使って詳しく解説されていたが、本書ではより丁寧かつ詳細な検討がなされている。また、本章において著者は「戦争における正義」は基本的に武力を行使する側の行為の許容可能性が問題になるのであって、被害をこうむる側（典型的には民間人）に対する道徳的配慮が根本的にかけている、という批判に対して謙虚に耳を傾ける。例えば、戦闘員と民間人の「区別」や個々の戦闘における手段と結果の比例性という原則は、場合によっては民間人や民用物への被害をもたらすことを認める例外規定として働くことを含意している。そうだとすると、正戦論は結局のところ開戦や個々の戦闘になんらかのお墨付きを与えるものとしてしか存在意義はないのではないか、という批判が出てくることになる。この問いについては次章で答えられることになる。

第四章では「正戦論の射程」として、正戦論の歴史的展開（アウグスティヌスから始まるキリスト教神学内の正戦論から近代国際法まで）を辿った後、正戦論の第三の領域として和解・謝罪・赦しをその構成要素とする「戦争後の正義」が扱われる。そして、最後に残る大きな問題として「正戦論の使い方」と「正戦論の限界」が検討される。この章は、第三章で為された問題提起、すなわち「正戦論は誰にとって、何の役に立つのか」「ことによるとそれは、戦争指導者の意思決定や個々の戦闘に従事した戦闘員の行為にお墨付きを与えるに過ぎないではないか」という批判に答えるものであると考えられる。著者は、正戦論の名宛人は歴史的には宗教エリートや政治・政策エリートないし将校などの軍事エリートであったが、20 世紀後半以降は一般市民をも対象とした一種の市民的徳目としての機能が期待されていることを指摘する。これによって、正戦論は単なる「机上の空論」でもなければエリートの独占物でもない、一種の市民哲学としての側面を持つことになる。そして、これによって自国民への犠牲をいとわない専制政治の論理や戦争へのファナティックな熱狂の渦から距離を置いた思考が可能になるとする。

第五章では「戦争倫理学の実践」として科学技術と戦争、軍事専門職倫理、拷問、テロリズム、原爆投下、アメリカによる対日軍事占領、赤十字国際委員会という七つのテーマが扱われる。これらの多くは技術倫理や職業倫理、あるいは歴史学や政策論といった分野とも関連する学際的な問題であり、詳細な検討を加えられているものも、今後重要になってくるファクターとしての紹介にとどまっているものもあるが、戦争倫理学の今後の課題として重要なものである。

補論では、法案成立後もいまだ議論の続く我が国の安保法制についての著者の見解が語られるが、派兵リスクの十分な検討と情報公開が必要であるとする論旨は明快であり、ここでその内容を説明するには及ばないだろう。

ここまで見てきたように、本書は戦争倫理学に関連するトピックを（三〇〇頁という）限られた紙幅の中でほとんど網羅的に扱い、正戦論という視座の下で一貫して記述されており、その筆致も丁寧かつ親切であるという意味で優れた入門書に必要な要件をすべて備えている。「おわりに」で書かれているように、正戦論がいわば戦争の倫理について語るための「コミュニケーションツール」であるとするならば（p.294）、このツールの重要性や使い方のマニュアルとして本書は完全に機能している、と言うことができる。もちろん、本書を入口として読者は最新の政治哲学や正戦論の理論がどうなっているのかに興味を持つこともあるだろう。本書の展開可能性についてはす

でに福原正人氏による詳細な書評があるのでそれを参考にしていただきたい[1]。

さて、以下では本書のような優れた入門書が出版されてから我が国の戦争倫理学の研究・教育がどのようなものになるか、あるいはどのようなものであるべきかについて若干の所感を述べておく。

応用倫理学としての戦争倫理学は、少なくとも現時点の日本の倫理学とその関連業界において、生命倫理学や情報倫理学、環境倫理学といった分野に比べて「マイナー」であることは事実だと思われる。あるいは本書「あとがき」にあるように何らかの理由で積極的に忌避されたり「キワモノ」のような扱いを受けてきたのかもしれない。

しかし、このような状況は徐々に変化している。ひとつは、学生のニーズの変化である。イラクやシリア、ウクライナといった現在進行形で生じている様々な武力紛争だけでなく、安保法制や近隣国のミサイル実験が頻繁に報じられることで、単に事実問題や歴史的経緯についてだけでなく、平和や戦争についての規範的な語りに興味をもつ学生の存在は倫理学の教員としても無視できないものになっている。もうひとつの変化は、本書を含む戦争と道徳の問題に関連した教材の充実である。『正しい戦争と不正な戦争』（風行社、二〇〇八年）や『戦争を論ずる ―― 正戦のモラル・リアリティ』（風行社、二〇〇八年）などウォルツァーの正戦論だけでなく、マクマーン（Jeff McMahan）の *Killing in War*（Clarendon Press, 2009 未邦訳）など倫理学の素養をもつ人間にとってはある程度読みやすい研究書にアクセスすることも可能になった。これは卒論などで戦争倫理学を扱いたい学生にとっても大きな変化である。

だが、このような機運の高まりにも関わらず、なおも大学での戦争倫理学の教育にはいくつかのハードルが残っているように思われる。それは私たちの持つ「戦争」なるもののイメージの捉え難さ、貧困さに由来している。学生たちに「戦争についてどのようなイメージを持っているか」と聞いたとき、（まるで関ケ原の戦いのように）兵士と兵士とが平地でぶつかり合っている図を想像する者も珍しくはないのである。そのため、戦争倫理学のケーススタディで問題になるような機関銃の発明以降の大量死や空爆のもたらす付随的被害、敵味方の区別の曖昧な内戦や治安戦特有の困難さにリアリティを感じられない、といった事態が生じているように思われる。

優れた生命倫理学者は生命倫理学の基本原則だけでなく関連する法令や裁判例の読み方、実際の医療事故や医療問題にも習熟している必要がある。事実問題についての確実な知識と結びつくことによってこそ、倫理原則や仮想事例の検討が意味を持って現れてくる。私は応用倫理学とは一般にそのような営みであると信じる。戦争倫理学を勉強したり授業で扱ったりする際にも、戦争そのものや国際法などの知識をバージョンアップすることが求められるだろう。

以上のような事情から、大学において戦争倫理学が生命倫理学や環境倫理学と並ぶポピュラーさ、手の出しやすさを獲得するにはまだしばらくの時間がかかるだろう。しかし、このような状況のなかでこそ「政治哲学または応用倫理学としての正戦論」の側面を整備した本書の意義は極めて大きいものである。

1　福原正人（2017）「戦争倫理学の手引き　書評―眞嶋俊造著『正しい戦争はあるのか ―― 戦争倫理学入門』」『公共研究』13：267-285